蘇軾のいびきの詩について

山口若榮

蘇軾はいひきを表す際に主として「鼻息」という語を用いる。詩を讀む者はこの言葉に出あうときに、自然と「荒々しい呼吸音」という音聲的な連想を引き出されて衝撃を受ける。そして、いひきを發している存在に注目する。詩の中において、何故いひきが描寫されているのたろうか。詩中ていひきをかいている人物か蘇軾本人てあることに、何か意味はあるのたろうか。また、蘇軾の「鼻息」の詩は、その後の詩にとのような影響を與えたのたろうか。本稿ては、これらの點について考察する。

なお、蘇軾の詩のテキストは、馮應榴輯注『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、二〇〇一）に據った。本文中て蘇軾の詩を引用する場合は、原則として『合注』の卷數のみを示した。また、詞のテキストについては、鄒同慶・王宗堂編『蘇軾詞編年校注』（中華書局、二〇〇二）に據り、引用の際には收錄卷次と頁數を示した。蘇軾の文章を引用する際には、孔凡禮點校『蘇軾文集』（中華書局、一九八六）の收錄卷數を示した。その他のテキストについては、適宜當該箇所に示した。

一、はじめに

北宋の文人蘇軾（字子瞻、號東坡、一〇三六～一一〇一）は、「鼻息」という言葉を用いて「いひきをかいて眠る自分自身」を描寫する詩を、計五首作った。そのうちの三首は熙寧六年（一〇七三）から熙寧八年の間に作られ、これは蘇軾か通判として杭州（現浙江省）にあった三十八歳から、知州事として密州（現山東省）にあった四十歳までの期間である。また、あとの二首は最晩年の元符三年（一一〇〇）の六月末から七月にかけて作られ、このとき六十五歳の蘇軾は流罪を許された直後て、配流先の海南島から廉州（現廣西壯族自治區）へと向かっていた。三十代後半と最晩年の二つの短期間において、蘇軾か「いひきをかいて眠る自分自身」という詩のモチーフに關心を持っていたことか分かる。このモチーフには二つの奇妙な點かある。まず、いひきは、知識人の文學として長い傳統をもつ「詩」というジャンルて扱うには不相應なほど「俗」な內容であるという點てある。にもかかわらす、蘇軾はこれを繰り返し用いている。また、詩中ていひきの音を發する人物か、蘇軾本人であるという點である。

二、蘇軾の「鼻息」と蘇軾以前のいびきの詩

蘇軾は人間か眠っているときのいひきを表す際に、しばしば「鼻息」という言葉を用いる。特に、自分自身のいひきを指して「鼻息」という言葉を用いるとき、蘇軾はこの言葉に特別な感慨を込めているようである。まず、何薳『春渚紀聞』巻六「東坡事實」の「裕陵睡賢士」の項に引く以下の逸話を見てみよう。(1)

・久之、復謂景文曰、「如某今日餘生、亦皆裕陵之賜也。」景文請其說。云、「某初逮繫御史獄、獄具奏上。是夕昏鼓既畢、某方就寢、忽見一人排闥而入、投篋于地、卽枕臥之。至四鼓、某睡中覺有撼體而連語云、學士賀喜者。某徐轉仄問之、卽曰「安心熟寢。」乃挈篋而出。蓋初奏上、舒亶之徒、力詆上前、必欲置之死地。而裕陵初無深罪之意、密遣小黃門至獄中視某起居狀。適某晝寢鼻息如雷、卽馳以聞。裕陵顧謂左右曰、「朕知蘇軾胸中無事者。」於是卽有黃州之命、則裕陵之恕、念臣子之心、何以補報萬一。

（之を久しくして、復た景文に謂ひて曰く、「某今日餘生あるか如きも、亦た皆な裕陵の賜なり」と。景文其の說を請ふ。云く、「某初め御史獄に逮繫せられ、獄具して奏上す。是の夕昏鼓既に畢はり、某方に寢に就かんとし、忽ち一人の排闥して入り、篋を地に投し、卽ち之に枕臥すを見る。四鼓に至り、某睡中に體を撼かして連語して「學士賀喜」と云ふ者有るを覺ゆ。某徐ろに轉仄して之を問へば、卽ち曰く「安心して熟寢せよ」と。乃ち篋を挈げて出つ。蓋し初めて奏上せしとき、舒亶の徒、力めて上前に詆り、必すや之を死地に置かんと欲す。而るに裕陵初めより深く罪するの意無く、密かに小黃門を遣はして獄中に至りて某の起居の狀を視しむ。適たま某晝寢し鼻息雷の如し、卽ち馳せて以て聞す。裕陵左右を顧みて謂ひて曰く、「朕、蘇軾か胸中に事無き者なるを知る」と。是に於いて卽ち黃州の命有れば、則ち裕陵の恕なり、臣子を念ふの心、何を以て萬一を補報せんや。）

蘇軾は元豐二年（一〇七九）七月、文筆によって朝政を誹謗したという廉で逮捕され、御史臺の獄に繫かれ取り調べを受けた。この事件は烏臺詩案と呼はれる。引用の逸話は、蘇軾自身か後年、獄中での體驗を友人の劉季孫（字は景文）に語ったというものてある。蘇軾は、自分か今生き長らえているのは「裕陵」（神宗皇帝）のお蔭である、と感謝の氣持ちを述へ、その理由を語る。その日の取り調へか濟んて蘇軾か就寢しようとしたとき、誰かか監獄の扉を押し開けて入って來て、持參した小箱を枕にして寢た。夜中の三時頃、蘇軾はその人に搖り起こされ、「學士、おめてとう」と祝辭を述べられた。意味を尋ねると、「安心してくっすり寢ていなさい（安心熟寢）」とたけ言い殘し、その人は小箱を手に持って出て行った。そして、神宗か密かに獄中の蘇軾の樣子を侍從に確かめさせたとき、ちょうと蘇軾は雷のような高いひきで晝寢をしていた（晝寢鼻息如雷）。そこて侍從はありのままを神宗に報告した。神宗は蘇軾の胸に一物無しと確認できたとして、周圍の者に告け、蘇軾は死罪を免れた。いひきか熟睡の證據と判斷されたためてある。「念臣子之心、何以補報萬一」は、わさわさ本心を確かめてくれた神宗の配慮に對する、蘇軾の感動を示す言葉てある。この話をするとき、實際に蘇軾は「某晝寢鼻息如雷」と語ったものと考えられる。ここでの「鼻息」は、心にわたかまりの一切無い人間の恬淡たるいひきを指す。

だか、「鼻息」は本來人間のいひきを指す言葉として一般的に使用

されたものではない。蘇軾以前の詩に「鼻息」の用例を求めると、たった「はないき（＝荒々しい呼吸）」を指すものばかりである。例えば、唐の李白の「古風五十九首　其二十四」（『李太白集』巻二、四部叢刊初編）に、

路逢鬬雞者　　路に雞を鬬はす者に逢ふ
冠蓋何輝赫　　冠蓋何そ輝赫す
鼻息干虹蜺　　鼻息　虹蜺を干し
行人皆怵惕　　行人　皆怵惕（ノフツフチ）す

とあるか、ここての「鼻息」は、雞を操る能力て出世した賈昌という人物の、氣負って鼻息か荒い様子を表現している。また、元稹の「八駿圖詩」（『元氏長慶集』巻三、四部叢刊初編）に、

朝辭扶桑底　　朝に扶桑の底を辭し
暮宿崑崙下　　暮に崑崙の下に宿る
鼻息吼春雷　　鼻息　春雷に吼え
蹄聲裂寒瓦　　蹄聲　寒瓦を裂く

という「鼻息」は、駿馬の激しい鼻息を指している。同しく元稹「蟆子三首　其三」（『元氏長慶集』巻四）は、序に「蟆、蚊類也。其實黑而小。（蟆は、蚊類也。其の實は黑くして小なり）」というように、蚊の一種についてうたった詩て、ここての「鼻息」は單に呼吸という意味てある。

誰令通鼻息　　誰か鼻息を通せしむ
何故辨馨香　　何の故に馨香を辨す

それに対し、「鼻息」か眠っている人間のいひきを表す早期の例は、孫樵[2]の文章「乞巧對」（『唐孫樵集』巻七、四部叢刊初編）に見ることかてきる。

：豫方高枕、偃然就寢、腹搖鼻息、夢到鄉國、槐花撲庭、鳴蜩噪晴：

（：豫方に高枕し、偃然として就寢せんとし、腹搖れて鼻息し、夢に鄉國に到る、槐花庭を撲ち、鳴蜩晴に噪く：）

この例ては「鼻息」か「高枕」や「就寢」とともに現れ、いひきをかいて眠っている人物、すなわち孫樵自身について述べていることか分かる。

たたし、「鼻息」か眠っている人のいひきを指す詩における用例は、北宋の梅堯臣まて待たねばならない。「乾明院碧鮮亭」（『宛陵先生集』巻三十七、四部叢刊初編）を見てみよう。

細藤織榻白晝眠　　細藤の織榻　白晝に眠り
寢農鼻息如雷吼　　寢り農く　鼻息　雷の吼ゆるかことし
10　世間百事不歷心　　世間の百事　心を歷せす
門外寒流徹溪口　　門外の寒流　溪口に徹す

この詩て梅堯臣は、自らの晝寢の充足感を述へている。くっすりとよく眠り大いひきをかくのか心地よい。そのときには「世間百事不歷心」、世の中の煩わしいことを全て忘れることかてきる。こう述べる際に、「鼻息」という言葉か用いられている。

ところて、「鼻息」に限らす、詩の題材に人間のいひきという題材か取り上げられた先例を求めると、梅堯臣よりも早くには、ます中唐の韓愈の「嘲鼾睡」二首かある。[3]「嘲鼾睡」については後述するか、齋師（タ）という人物のいひきの凄まじさについて、おどろおどろしく述べた詩てある。詩中ていひきは「聲氣」または「聲」などと書き表される。

また、梅堯臣と同世代の歐陽脩の詩にも、いひきをかいて眠る人物

と周圍の反應か、骨稽味を帯ひて描かれている。「有贈余以端谿緣石枕與蘄州竹簟、皆佳物也。余既喜睡、而得此二者不勝其樂、奉呈原父舍人・聖俞直講（余に贈るに端谿の緣石枕と蘄州の竹簟とを以てするもの有り、皆佳物なり。余既に睡るを喜めは、此の二者を得て其の樂しみに勝へす、原父舍人・聖俞直講に奉呈す）」（『歐陽文忠公集居士集』巻八、四部叢刊初編）の詩である。病氣を理由に閑職を請うて還った歐陽修か、ようやく大好きな晝寢を堪能できることを喜んた詩で、詩題から分かるとおり、これは枕と簟とを贈ってくれた人に對する禮狀も兼ねていると考えられる。[4]

15　一從僦舍居城南　　一たひ僦舍して城南に居してより
　官不坐曹門少客　　官に坐曹せす　門に客少し
　自然唯與睡相宜　　自然　唯た睡りと相宜し
　以懶遭閑何愜適　　懶を以て閑に遭ふは何そ愜適ならん
　從來羸茶苦疲困　　從來　羸茶　苦た疲困
20　況此煩歊正炎赫　　況んや此の煩歊の正に炎赫なるをや
　少壯喘息人莫聽　　少壯の喘息は人聽くこと莫きも
　中年鼻鼾尤惡聲　　中年の鼻鼾は尤も聲惡し
　癡兒掩耳謂雷作　　癡兒耳を掩ひて雷作ると謂ふ
　灶婦驚窺疑釜鳴　　灶婦驚き窺きて釜の鳴るかと疑ふ
25　蒼蠅蟣蠓任緣撲　　蒼蠅　蟣蠓　緣撲に任せ
　蠹書懶架拋縱橫　　蠹書　懶架　縱橫に拋つ

第二十二句に、「中年」に至り疲れ切った自分は大いひきをたてるようになったといい、「鼻鼾」という言葉を用いている。續く二句では「癡兒掩耳謂雷作、灶婦驚窺疑釜鳴」と、子供らや料理女かいひきの騷音に驚いてあたふたする光景を描いていてユーモラスてある。

三、不平のいびき――蘇軾の「鼻息」の諸相（I）――

先に見たように、「鼻息」を人間のいびきの意味て詩に用いたのは梅堯臣か初めてである。また、いひきをかいて眠る人物を表現するという詩の題材に關しては、中唐の韓愈の「嘲鼾睡」二首か初めての例である。蘇軾のいひきの詩のうち、熙寧年間に作られた三首は、韓愈の「嘲鼾睡」二首から、いひきにとんなイメーシを持たせるかという點において、最も大きな影響を受けている。

ます、韓愈の「嘲鼾睡」二首のうち、其一を見てみよう。[5]

　　詹師晝睡時　　詹師晝睡る時
　聲氣一何猥　　聲氣一に何そ猥なる
　頑鼸吹肥脂　　頑鼸肥脂を吹き
　坑谷相鬼磊　　坑谷相鬼磊たり
　雄哮乍咽絕　　雄哮乍ち咽絕
　每發壯益倍　　發する每に壯にして益ます倍す
　有如阿鼻尸　　阿鼻尸のことき有り
　長喚忍衆罪　　長く喚んて衆罪を忍ふ
　馬牛驚不食　　馬牛驚いて食はす
　百鬼聚相待　　百鬼聚りて相待つ
　木枕十字裂　　木枕十字裂け
　鏡面生痱癤　　鏡面に痱癤を生す
　鐵佛聞皺眉　　鐵佛聞きて眉を皺め
　石人戰搖腿　　石人戰きて腿を搖かす
　孰云天地仁　　孰か云ふ天地仁なりと

吾欲責眞宰　　吾眞宰を責めんと欲す
幽尋虱搜耳　　幽尋　虱　耳を搜り
猛作濤翻海　　猛作　濤　海に翻る
太陽不忍明　　太陽明なるに忍びず
飛御皆惰怠　　飛御皆惰怠す
乍如彭與黥　　乍ち彭と黥と
呼寃受葅醢　　寃を呼んで葅醢を受くるかことし
又如圈中虎　　又た圈中の虎
號瘡兼吼飯　　瘡に號ひ兼ねて飯に吼ゆるがごとし
雖令伶倫吹　　伶倫をして吹かしむと雖も
苦韻難可改　　苦韻改むへきこと難し
雖令咸巫招　　咸巫をして招かしむと雖も
魂爽難復在　　魂爽れて復た在り難し
何山有靈藥　　何れの山にか靈藥有らん
療此願與採　　此を療せは願はくは與に採らん

詹師という僧のいひきかいかに凄ましいかか、さまさまな比喩を用いておとろおとろしく描寫されている。冒頭二句「詹師晝睡時、聲氣一何猥」には、他人のいひきを聞かされる韓愈の不快感か表れている。詹師のいひきは、次第に激化する野獣の叫ひ（「雄哮」、第五句）のようてあり、「有如阿鼻尸」（第七句）というように罪人の絕叫と百鬼の歡聲かこたまする地獄繪圖の音に喩えられるほとて、「木枕十字裂、鏡面生痱瘡」（第十一・十二句）と、そこらしゅうのものを壞して駄目にしてしまい、「鐵佛聞皺眉　石人戰搖腿」（第十三・十四句）ということく、決して動じないはすの佛像や石像をも動搖させるのてある。

谷口匡氏は、「嘲鼾睡」二首を、元和二年（八〇七）當時の韓愈の心境をよく表わす詩の一例として取り上げ、詩の制作意圖と內容について詳細な分析を加えている。[8] 谷口氏によれば、韓愈は「詹師」のいひきを題材に荒唐無稽な戯れの詩を作ったのては決してなく、自分へのいわれのない蜚語に對する抗議としてこの詩を作ったのてあり、詩中で詹師かたてるいひきの騷音は、韓愈に對する惡い評判を象徴するものた、という。また、「嘲鼾睡」其二の冒頭は、以下のように始まる。

詹公坐卧時　　詹公坐卧する時
長睡無不穩　　長睡穩やかならさる無し
吾嘗聞其聲　　吾嘗て其の聲を聞けは
深慮五藏損　　深く慮へて五藏損す

谷口氏は、「吾嘗聞其聲、深慮五藏損」というのは、韓愈か「そうした騷音に深刻に惱んているさまを示しているのてある」と說明する。

韓愈は詹師のいひきを聞かされて惱み、五臟か損壞するほとてあるか、一方て、いひきをかいている當の詹師の樣子は「詹公坐卧時、長睡無不穩」と、いかにも心地よさけてある。しかし、詹師の眠りは安定した正常なものてはない。其一の詩において「孰云天地仁、吾欲責眞宰」と、恐ろしい騷音の責めを眞宰に負わせているように、いひきか起こるのは「天地不仁」に原因かあるとする。詹師もまた天地の不仁に刺激されて、「雖令伶倫吹、苦韻難可改、雖令咸巫招、魂爽難復在」と、すてに手の施しようかないほど魂を破られ、精神の平衡を失っている。韓愈によれば、いひきとは「不平」の音なのてある。韓愈は「送孟東野序」（『朱文公校昌黎先生文集』卷十九）において、以下のように言う。

大凡物不得其平則鳴。草木之無聲、風撓之鳴。水之無聲、風蕩之

鳴。其躍也或激之。其趍也或梗之。其沸也或炙之。金石之無聲、或擊之鳴。人之於言也亦然。有不得已者而后言。其謌也有思。其哭也有懷。凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎。

（およそ物は平衡の狀態を失えは音をたてる（鳴る。）草木はもともと音をもっているわけではないが、風かゆかめかきみだすことによって音をたてる。水はもともと音をもっているわけではないか、風かゆり動かすことによって音をたてる。水が勢いよくおとりあがるのは、刺激を受けるからてある。堰をきったように流れるのは、塞かれるからてある。わきたつのは、熱せられるからである。金石はもともと音をもっているわけてはないか、それを打つことによって音をたてる。人と言葉との關係もまた同様である。やむにやまれぬことかあってはじめて言葉になるのてある。歌うのは考えかあるからてある。聲をあげて立くのは思いかあるからてある。口から出て音聲になることの背後には、すべて平衡てない狀態かあるのてある。[7]）

「送孟東野序」の論法を敷衍すると、人のいひきも、世界に何かその人の平衡を失わせる狀態かあったとき、文字通り「鳴」ったものだと考えることかできるだろう。

右のことか言えるなら、韓愈か、いひきに「不平」の音というイメージを持たせたことになり、そのことに私は注目したい。たしかに、「嘲鼾睡」二首において、いひきは韓愈を妬む他者から韓愈に對して向けられた惡意のこもった蜚語の象徴であって、韓愈自身の不平を直接に表すわけではない。しかし、向けられた惡意に対しては「不平」の心か込められており、惡意を向けられる不快に堪えかねてさらに「不平」の詩をもって返したのが韓愈の「嘲鼾睡」二首である。詩に「いひき」かモチーフとして使われるということは、その作者には「やむにやまれぬこと」かあり、言葉にせすにはいられないということなのてある。作者が自らの置かれた狀況について何か言わさるを得ないという「不平」を動機として詩を作り、その中に「いひきをかく人物」が象徴的な意味をもって表れるという初めての例を、韓愈か開いたということになる。

蘇軾は、熙寧年間にいひきの詩を作った際、韓愈の「嘲鼾睡」に込められた「不平」のイメージを意識していた。それもただ単に意識するだけてなく、いわれのない中傷を受けて苦しんだという點で、蘇軾は韓愈に對して大いに共感するところかあった。蘇軾の「書退之詩」（『蘇軾文集』卷六十七）という題跋文には、

（前略）・退之得磨蝎爲身宮。而僕乃以磨蝎爲命。平生多得謗譽、殆是同病也。

（自分は韓愈と一緒のサソリ座生まれたか、韓愈と同様にさまざまな毀譽褒貶にさらされるのは、これはもう宿命なのかも知れない。）

と、感慨の意を示している。蘇軾は京師にあった熙寧三年（一〇七〇）、侍御史知雜事で新法黨の謝景溫によって、丁憂（蘇洵の喪中）期間中に私鹽を購入し販賣したという彈劾を加えられた。事實無根で罪には問われなかったか、この事件をきっかけに、舊法黨員として京師に居るのは危險な情勢たと判斷した彼は、地方官として杭州へ轉出したのである。[8]地方官となった蘇軾か目にしたものは、新法黨か急き推進する改革についてゆけずに苦しむ民衆の現實だった。[9]熙寧六年に作られた「佛日山榮長老方丈五絕　其四」（卷十）からは、日頃彼か爲政者の一人として、己の無力さに惱んでいたことか分かる。

食罷茶甌未要深　　食し罷って茶甌未た深きを要せず
清風一榻抵千金　　清風一榻　千金に抵る
腹搖鼻息庭花落　　腹搖らいて鼻息に庭花落つ
還盡平生未足心　　還し盡くす平生未た足らざるの心を

第三句に「腹搖鼻息庭花落」といい、ここで「鼻息」すなわちいびきをたてているのは、晝寢をしている蘇軾自身である。一見して平和な午後の晝寢を樂しんでいる詩たが、第四句には「還盡平生未足心」とあり、彼は平生心が滿たされていないのだということが分かる。心の滿たされない部分を心地よい眠りによって全て取り返したのたと言うか、敢えてそのことを詩に強調せすにおれないのは、彼にとって安らかな眠りは滅多に得られないもので、また心やすく眠ることを許さない現狀かあったからてある。そのことを暗示するのか第三句の「鼻息」てある。實際には、蘇軾は晝寢後の目覺めの爽やかさか嬉しくてこの詩を作ったに違いない。しかし、心地よく眠る自分自身に敢えていひきの音をたてさせたのは、眠りなからても自然と「不平」の音をたて、社會に働きかけすにはいられない、責任感ある士大夫の自畫像をユーモラスに描き出し、日々心に抱いている政治への批判を韜晦する意圖かあったからである。

次に擧ける「宿海會寺」（卷十）ても、蘇軾はいひきに「不平」の音というイメーシを持たせる韓愈の作品を意識している。海會寺とは、杭州の西の臨安縣の寺で、施宿の『東坡先生年譜』によれば、この詩も熙寧六年の作てある。「佛日山榮長老方丈五絕　其四」との違いは、自分のいひきか周圍を驚かせるという要素か加わっている點である。全十六句の詩は、前半ては海會寺に至る道行きを、後半ては城塞のような山寺に到着してからの狀況を述へるという構成になっている。ここでは詩の後半八句を引く。

大鐘橫撞千指迎　　大鐘橫さまに撞いて千指迎へ
高堂延客夜不扃　　高堂　客を延いて　夜扃さす
杉槽漆斛江河傾　　杉槽　漆斛　江河を傾く
本來無垢先更輕　　本來　無垢　先ひて更に輕し
倒床鼻息四鄰驚　　床に倒れて　鼻息　四鄰驚き
紈如五鼓天未明　　紈如たる五鼓　天未だ明けす
木魚呼粥亮且清　　木魚　粥を呼んで亮として且つ清し
不聞人聲聞履聲　　人聲を聞かす　履聲を聞く

第十二句「本來無垢先更輕」については、施元之およひ顧禧の注（以下「施注」）か指摘するように、『維摩經』佛道品にある、

八解之浴池、定水湛然。滿布以七淨華、浴此無垢人。

（八解の浴池に定水湛然たり。滿布するに七淨華を以てし、此の無垢の人を浴せん。）

という一段を踏まえる。すなわち、蘇軾はこの句において、海會寺て休浴した自分は「無垢」であると言う。さらに、王狀元注本か引く堯卿の注は、『景德傳燈錄』卷十七の以下の記事を引く。

襄州鷲嶺善本禪師、因入浴室、有僧問、「和尚是離垢底人、爲什麼却浴。」師曰、「定水湛然滿、浴此無垢人。

（襄州の鷲嶺善本禪師、浴室に入るに因りて、僧の問ふもの有り、「和尚は是れ離垢底の人なるに、什麼の爲に却って浴する」と。師曰はく、「定水湛然として滿つ、浴するは此れ無垢の人なり」と。）

すなわち禪師は、自分は無垢であるからこそここに入浴するのたと、『維摩經』の一段を用いて痛快な反論をしたのである。蘇軾は、一〇

○四年に道原の手によって成った『景德傳燈錄』を讀み、この出典を踏まえて自らの「無垢」を强調していると考えられる。

さらに、第十三句「倒床鼻息四鄰驚」に蘇軾自身のいひきの様子か描かれるか、施注は韓愈「石鼎聯句詩序」（『朱文公校昌黎先生文集』卷二十一）を、いひきか周圍を唖然とさせる狀況の例として擧げる。

「石鼎聯句詩序」とは以下のような筋である。[10]

元和七年十二月四日の夜、衡山の道士軒轅彌明は進士の劉師服を訪ねた。そこには校書郎の侯喜という者も來合わせていた。侯喜は近ごろ詩に巧みだとの評を得て、その時も劉師服と詩について論じていた。侯喜は、軒轅彌明か容貌醜く楚訛りて話す様子を見て、彼を輕んした。それゆえ軒轅彌明は氣分を害し、鑪中の石鼎を指し、侯喜に聯句をしようと挑戰し、劉、侯、彌明の三人て聯句を始めた。劉と侯とは始め彌明を侮っていたか、逆に全く敵わなかった。劉と侯とか苦吟するのに對し、彌明はやすやすと自然に句を續け、しかも句の內容は二人を嘲弄するものたった。ついに句を繼げなくなった二人は彌明に降參し、弟子入りを願い出るか、彌明は二人を鼻てあしらった。さらに、完成させた聯句については、二人のレヘルに合わせて作った詩ゆえくたらない出來たと言い、自分の本領はこの程度ではないか、君達には理解できるはすもないのて自分はもう何も言わないと宣言し、その場て大いひきをかきなから寢てしまい、一切應答しなかったという。

軒轅彌明か二人を無視して大いひきて寢るというくたりの文か、

道士倚牆睡、鼻息如雷鳴。二子怛然失色、不敢喘。

（道士牆に倚って睡り、鼻息雷鳴のことし。二子怛然として色を失ひ、敢へて喘かす。）

なのてある。施注の指摘するとおり、蘇軾の「倒床鼻息四鄰驚」一句は韓愈「石鼎聯句詩序」における軒轅彌明のいひきの逸話を踏まえている。この場合、蘇軾はこの句に以下のような意味を込めていると解釋できる。器の小さい相手と意志を通するには、相手か喜んて理解する言葉を用いるよりほかないか、自らの信條として認めるわけにはゆかない。自分は今、言わんとすることを腹に押し込めているか、その志はいひきとなって自然と鳴り響き、それは地方の山寺からてあっても周圍を驚かせるほとの强い批判てある、ということてある。蘇軾か批判するものは、反對者の存在を許さす排除しようとする新法黨の政治てある。蘇軾は政治批判を韜晦し、なおかつ己の志をも示すために、「いひきをかいて眠る自分自身」を敢えて詩に描いたのてある。

政治批判を韜晦しきれなかったいひきの詩か、次に擧げる「次韻劉貢父李公擇見寄二首　其一」（卷十三）てある。この詩は蘇軾か知密州の任にあった熙寧八年の作てあり、後に「譏諷朝廷」の證據として彼の裁判記錄てある『烏臺詩案』に採られた。[11]

白髮相望兩故人
眼看時事幾番新
曲無和者應思郢
論少卑之且借秦
歲惡詩人無好語
夜長鰥守向誰親
少思多睡無如我
鼻息雷鳴撼四鄰

白髮相望む兩故人
眼に看る時事の幾番か新たなるを
曲は和する者無く應に郢を思ふへし
論は少しく之を卑しくして且く秦を借れ
歲惡しくして詩人　好語無し
夜長くして　鰥守誰に向かって親しまん
思ひ少なく睡り多きは我に如くは無し
鼻息雷鳴して四鄰を撼かす

『烏臺詩案』の內容は、御史か蘇軾にかけた壓力と切り離して考えることはできない。たか、この詩の解釋については、新法に批判的たという點て共通する友人に、本心を吐露したと受け取るのか自然てあ

る。『烏臺詩案』によれば劉攽（字は貢父）と李常（字は公擇）の詩それぞれに次韻したものたというか、劉攽も李常も共に新法を批判して左遷された人物である。第二句「眼看時事幾番新」は、新法黨政府か頻繁に法を改めることを指している。第三句「曲無和者應思郢」は、『文選』巻四十五に收められる宋玉の「對楚王問」にいう、郢において俗な歌は和する者か多いか立派な歌になればなるほと和する者か少なくなるという話に基つくもので、[12] 具體的には熙寧四年に神宗か科擧における詩賦の試驗を廢止したことを指す。蘇軾は詩賦試驗の廢止に反對て、熙寧四年には「議學校貢擧狀」（『蘇軾文集』巻二十五）を上って神宗を諫めている。また、第四句「論少卑之且借秦」は、新法黨の主導によって、現實の政治に對する實踐的な論文ばかりか重視され、詩文なと實務能力と關わりのない論は顧みられなくなったことを言う。第五句「歲惡詩人無好語」は、民の事情を解しない强引な政治のもと、折しも災害や盜賊の害に人々か苦しめられていたことを批判する。七八句の「少思多睡無如我」は、日頃思うところか澤山あることの裏返してあり、「鼻息雷鳴撼四鄰」は先に見た「宿海會寺」詩と同樣、言わんとすることを腹に押し込めても、社會の現狀を憂うる士大夫の志はいびきとなって自然と鳴り響き、必すや周圍を驚かせてその注意を喚起するということてある。實際、蘇軾は筆禍事件に遭ったので、この詩は充分に「撼四鄰」したことになる。「いひきをかいて眠る自分自身」というモチーフに政治批判をうまく韜晦しきれなかったか、「不平」の音として注目を集めた點において、この詩は成功をおさめた。

このように、蘇軾は熙寧年間に「鼻息」の詩を三首作り、そこにいひきをかいて眠る蘇軾自身を登場させた。その眞意は、自らの信條として、言うへきことはたとえ明言することか憚られる情勢であっても主張せさるを得ない、という姿勢を示すためてある。韓愈の詩と明らかに異なるのは、詩中ていひきをかくのか蘇軾自身てあって他人てないことてある。また、「宿海會寺」の「倒床鼻息四鄰驚」や、「次韻劉貢父李公擇見寄二首　其一」の「鼻息雷鳴撼四鄰」は、歐陽修の詩に見た「癡兒掩耳謂雷作、灶婦驚窺疑釜鳴」に近い表現てある。おそらく蘇軾は、眠っている自分自身か卷き起こす騷動を表現するに際し、師の歐陽修の詩のユーモアからヒントを得たてあろう。蘇軾の熙寧年間における「鼻息」の詩は、韓愈に倣った「不平」の象徴としてのいひきを、歐陽修に學んた諧謔の表現て包んたものてある。

四、恬淡のいびき――蘇軾の「鼻息」の諸相（Ⅱ）――

蘇軾は、熙寧年間の詩三首の後、二十五年にわたって「鼻息」の詩を作らなかった。次に「鼻息」の詩か現れるのは元符三年（一一〇一）、最晩年の六十五歳の時てある。晩年の二首について注目すへき點は、熙寧年間の「鼻息」か持っていた「不平」というイメーシか拂拭され、うららかな心て熟睡する狀態を象徴する「安心熟寢」のいひきへとイメーシか變化している點である。空白の二十五年の間に、蘇軾の身は浮沈を繰り返した。元豐年間には烏臺詩案を經て黃州へ流罪となり、五十歳代には所謂「元祐の更化」て一度は中央政治に復歸した。たか知杭州の職を願って京師を離れた後、新法黨勢力の復活にしたかって次第に南方へと貶謫せられ、果ては海南島まて流された。二十五年の間に、蘇軾の心境に大きな變化のあったことか分かる。もっとも詩てはなく詞に、「鼻息」という言葉か現れるものか一首ある。元豐六年

（一〇八三）四月、蘇軾が罪人として黄州にあった時の詞「臨江仙」（中冊、四六七頁）を見ておこう。前闋を引く。

夜飲東坡醒復醉　夜東坡に飲んで醒めて復た醉ふ
歸來髣髴三更　歸り來れば髣髴として三更なり
家童鼻息已雷鳴　家童の鼻息　已に雷鳴し
敲門都不應　門を敲けとも都て應せず
倚杖聽江聲　杖に倚りて江聲を聽く

畑で少し酒を飲んでから日付の變わる頃に歸宅してみると、ボーイは既に主が戻ったのにも氣付かぬほど熟睡して高いひきであった、という情景である。この「鼻息」は「家童」のものであり、他者のいびきを描寫している點では先の蘇詩三首と異なるが、「鼻息」が無防備な熟睡狀態を示すものとして表現されている點に注目したい。元豐六年の時點で、「鼻息」に込められていた「不平」のイメーシは既に無くなっている。

蘇軾の心境の變化は、彼の獄中での體驗と關わっているのではないかと私は考える。先述の『春渚紀聞』の逸話において、諜報員らしき人物が蘇軾の起居を監視していた。もし獄中の蘇軾に皇帝への謀反の念ありと判斷されれば、彼はすぐに處刑されたのだろう。たが蘇軾は不審な樣子もなく取り調へに應し、自ら詩に「少思多睡無如我、鼻息雷鳴撼四鄰」とうたったとおりの姿で眠っていた。「次韻劉貢父李公擇見寄二首　其一」は『烏臺詩案』に採られた詩であり、すなわち神宗もこの詩を知っていた。『春渚紀聞』において箱を提げた人物が「學士賀喜」「安心熟寢」と告げたというのは、蘇軾の詩は事實をそのまま述へたものとして好意的に解釋しよう、という意思を皇帝が示したという意味だと考えられる。蘇軾が『春渚紀聞』の記事にある內容を語ったのは、おそらく元祐六年（一〇九一）頃のことたろう。というのは、彼は潁州に在ったこの時期に、ちょうと聞き手の劉季孫と頻繁な交流があったためである。蘇軾の「鼻息」は烏臺詩案を境に、文字通りの「安心熟寢」に直結するものとなった。

元符三年の詩二首を見てみよう。この年、彼は罪を許され、海南島から廉州（現在の廣西壯族自治區）へ移れとの命を受け、六月に出發して瓊州海峽を渡った。「自雷行廉、宿興廉村淨行院」（卷四十三）は、海を渡った蘇軾か、廉州へ向かう途中に淨行院という小さな山寺に立ち寄って休んたことを述べた詩である。傅藻の『東坡紀年錄』によれば、興廉村の淨行院に立ち寄ったのは六月二十五日のことである。

荒涼海南北　荒涼たり海の南北
佛舍如雞棲　佛舍　雞棲のごとし
忽行榕林中　忽ち榕林の中を行けば
跨空飛栱枅　空に跨って栱枅を飛ばす
當門列碧井　門に當って碧井列たり
先我兩足泥　我か兩足の泥を先ふ
高堂磨新磚　高堂新磚を磨し
伺戸分角圭　伺戸角圭を分つ
倒床便甘寢　床に倒れて便ち甘寢し
鼻息如虹霓　鼻息　虹霓のごとし
童僕不肯去　童僕　肯へて去らず
我爲半日稽　我れ　半日の稽を爲す
晨登一葉舟　晨に一葉の舟に登り
醉兀十里溪　醉兀　十里の溪
醒來知何處　醒め來たりて　知るや何れの處そ

歸路老更迷　　歸路　老いて更に迷ふ

睡眠中の蘇軾自身か描寫されているのは第九句から第十二句の「倒床便甘寢、鼻息如虹霓、童僕不肯去、我爲半日稽」て、自分は大いびきで氣持ちよく眠っているか、傍らのボーイは特にその音に驚いて逃げ出すこともなく、半日休憩したという。いびきをかいて眠る自分自身を題材として詩に描寫するという基本そのものは、熙寧年間の三首の詩と變わらない。たか、この詩においては、付き添いの者を驚かせ混亂させるような諧謔性は無く、同時に不平の要素もない。第十句の「鼻息」は第九句の「甘寢」と對になっており、蘇軾か自然に熟睡できる狀態にあることを示している。詩中にいびきの音か示されてユーモラスてあり、全體として心のとかな午睡の情景を描いている。「鼻息」自體、周圍に溶け込むような音てあって、不快感をともなう雜音てはないのてある。

次に擧げる「歐陽晦夫惠琴枕」(卷四十三)は、「鼻息」の表現を用い、熟睡の自然さをより强調して表した詩てある。これは蘇軾か廉州に到着してから約一週間後に作られた詩て、彼の睡眠中のいびきか、古代の名曲の音律に正しく合致していると述へる。

中郎不眠仰看屋　　中郎眠らす　仰いて屋を看
得此古椽圜尺竹　　此の古椽圜尺の竹を得たり
輪囷濩落非笛材　　輪囷濩落　笛材に非す
剖作袖琴徽軫足　　剖きて袖琴を作して徽軫足れり
流傳幾處到淵明　　幾處に流傳して淵明に到り
臥枕綸巾酒新漉　　臥して綸巾に枕し　酒新に漉す
孤鸞別鵠誰復聞　　孤鸞別鵠　誰か復た聞かん
鼻息鼾鼾自成曲　　鼻息鼾鼾　自ら曲を成す

蔡邕のように音律を知る人か眠らすに屋根を仰き見て、古い椽から周圍一尺もあるこの竹を見つけた。たか太すきるうえ穴も大きすきて笛を作るには向かないので、割いて小振りの琴をつくり、絲を張り琴柱を立てた。これか何箇所かに流轉したのち陶淵明のような私のもとへ來たので、酒を漉したばかりの頭巾も脱かずこれに枕したりする。「孤鸞」や「別鵠」といった名曲はもう聽くことかできないか、かわりに私の大いびきかコウコウとかってに演奏をしている。

第七句について、王狀元注本に引く趙次公の注は、「孤鸞、別鵠は、古琴の名曲なり」という。第五句では「流傳幾處到淵明」と自らを陶淵明に比しているか、「孤鸞」「別鵠」という曲名も陶淵明の詩を踏まえている。「孤鸞」「別鵠(別鶴)」は、「擬古」其五において、

知我故來意　　我の故に來たる意を知り
取琴爲我彈　　琴を取りて我か爲に彈す
上弦驚別鶴　　上弦　別鶴に驚き
下弦操孤鸞　　下弦　孤鸞を操る

と、陶淵明かわさわさ會いに行った東方の隱士か淵明のために演奏した古い琴の名曲の名であるとおり、孤高の隱士の比喩である。淵明の句を踏まえたうえて「孤鸞別鵠誰復聞、鼻息鼾鼾自成曲」というとき、蘇軾は、自分の志の表れてあるいびきの音は、淵明か尊敬した孤高の隱士による演奏に勝るとも劣らないものたと言っている。結句の「鼻息鼾鼾自成曲」については、さらに、施注か引く唐の段成式の『酉陽雜俎』(續集、卷三、四部叢刊初編)の記事を踏まえている。

許州有一老僧、自四十夏已後、每寐熟即喉聲如鼓篁、自成韻節。二十餘年如此。許州伶人伺其寢、即譜其聲。按之絲竹、皆合古奏。僧覺亦不自知。

（許州に一老僧有り、四十の夏より已後、寐熟する毎に卽ち喉聲鼓篁の如く、自ら韻節を成す。許州の伶人其の寢を伺ひ、卽ち其の聲を譜す。之を絲竹に按するに、皆古奏に合す。僧覺むるも亦た自ら知らず。二十餘年此くの如し。）

この許州の老僧は、自分では氣付かないうちにいひきをかき、しかもその音が古代の音律に合致していることを、音樂の專門家である樂人によって證明された。蘇軾はこの話を踏まえ、それならば自分が睡眠中に自然と鳴らしているいひきの音もまた、許州の老僧のそれと同樣に高尙な音樂たと自贊していることになる。熟睡中の人が、自分のいひきを意識して聽くことはない。したかって、熟睡していたはずの蘇軾が自分のいひきかとんな音であるかを得意氣に論しること自體、ますユーモラスである。肯えて自分の「鼻息」の長所について語ってみせるという屈託の無さか、彼のうららかな心境と眠りの自然さを證明している。

五、詩語「鼻息」の展開

蘇軾は、晩年に作った二首の詩て、詩中の人物のいひきを指す「鼻息」のイメーシを「不平」から「安心熟寢」へと修正した。蘇軾が詩に用いた「鼻息」は、彼か詩を作るそばから同時代の文人たちに吟味されつつ採り入れられ、さらに、蘇軾の文學に學んた後人に受け繼かれていった。

例えは、蘇軾の弟である蘇轍（字は子由、號は潁濱または欒城、一〇三九～一一一二）の、「和王適炙背讀書」（『欒城集』卷十二、四部叢刊初編）という詩を擧げる。これは、元豐六年（一〇八三）秋の作て、先に擧げた蘇軾の詞「臨江仙」か作られたのと同し年てある。

少年讀書處　　少年讀書する處
寒夜冷無火　　寒夜冷やかにして火無し
老來百事慵　　老來　百事慵し
炙背但空坐　　背を炙りて但た空しく坐す
眼昏愁細書　　眼昏くして細書を愁ひ
把卷惟恐卧　　卷を把りて惟た卧すを恐る
寒衣補故褐　　寒衣故褐を補ひ
家釀熟新糯　　家釀新糯熟す
微微窗影斜　　微微として窗影斜めに
曖曖雲陰過　　曖曖として雲陰過く
昏然偶成寐　　昏然として偶たま寐を成し
鼻息已無奈　　鼻息已に奈ともする無し
兒童更笑呼　　兒童更ごも笑ひて呼ひ
書冊正前墮　　書冊正前に墮つ
衰懶今自由　　衰懶　今自ら由り
不復問冬課　　復た冬課を問はす

若い頃讀書にはけんた場所ては寒い夜に火の氣もなかったか、年をとった今はすべてか氣怠く火を背にしてほんやりと座っている。眼かよく見えす細かい文字にうんざりし、書卷を手にとっては倒れて眠ってしまわないかと氣遣う。薄い服をはおって古い服を補い、自家製酒をつくるための糯米も實っている。かすかな枝の影か窓に映って斜めに、薄暗く雲の陰か通り過きる。朦朧としていつの閒にか眠りに落ち、いひきはもうとうしようもない。子供たちは代わる代わる笑って呼ひ合い、書卷は眞正面に落ちた。老い衰えて気怠いのを言い譯にして、冬の仕事をしないのは言うまてもない。

十一・十二句に「昏然偶成寐、鼻息已無奈」、眠りに落ちたとき自然に發せられるいひきを自分ではどうしようもないと言い、「鼻息」の語か用いられている。續く二句では「兒童更笑呼、書冊正前墮」と、いひきの音を背景に、周圍の光景か描かれる。子供たちか可笑しかって呼ひ合ったり、いつの間にか本を落としたまま眠りこける怠そうな自身の様子を書き込むのは、歐陽脩と蘇軾の延長上にあるユーモアの表現と言える。ただ、この詩における「鼻息」は、蘇軾の詩に見たほと特別な意味を持たない。蘇轍のこの詩の主題は、慵さにまかせて閑を満喫するというもので、概ね白居易以來の閑適詩の系譜と言えるたろう。たた、詩の中にいひきをかく自身を登場させ、「鼻息」という言葉か採用されていることには注意しておきたい。さらに、蘇轍は崇寧三年（一一〇四）にも、「鼻息」を用いた「葺東齋」（『欒城後集』巻三、四部叢刊初編）詩を作っている。

敝屋如燕巢　　敝屋燕巢のごとく
歲歲添泥土　　歲歲泥土を添ふ
泥多暫完潔　　泥多くして暫く完潔
屋老終難固　　屋老いて終に固め難し
05 況復非吾廬　　況んや復た吾か廬の
聊爾避風雨　　聊かも爾か風雨を避くるに非さるをや
圖書易新幌　　圖書新に幌を易へ
几杖移故處　　几杖　故處を移す
宵眠不擇安　　宵眠擇はすして安んし
10 鼻息若炊釜　　鼻息炊釜のことし
兒孫喜相告　　兒孫喜ひて相告け
定省便蚤莫　　定省　便ち蚤莫

我生溪山閒　　我れ溪山の閒に生まれ
弱冠衡茅住　　弱冠にして衡茅に住む
15 生來乏華屋　　生來華屋乏しきも
所至輒成趣　　至る所輒ち趣を成す
苦恨無囊金　　苦た恨む囊金無きを
莫克償地主　　地主に償ふを克くする莫し
投老付天公　　投老　天公に付き
20 著身豈無所　　身を著くるに豈に所無からん

私の破れた家はツバメの巣のように、年ことに泥土か積み重なってゆく。ツバメの巣は泥か多ければ暫くの閒とても清潔たか、巣か古くなると固めにくくなってしまう。ましてや私の家はおまえか風雨を避けるのに少しも役立たないから尚更た。書物は新しく表紙をとりかえて、机とひしかけを移動させる。夜の眠りはとこてあっても安らかて、いひきは釜の飯を炊いててもいるようた。子孫は喜んて聲を掛けあい、明け暮れよく世話をしてくれる。私は山谷の閒に生まれ、二十歲にはもう隱居の草舍に住んていた。生まれてこのかた立派な御殿とは無緣たか、至る先々て趣を味わえる。恨めしいのは金缺病て、地主に地代を支拂えないこと。老年に至って天を頼みとすれは、とこてもこの身を落ち着かせられる。

隱居の閑雅な悟りの境地を述へた詩て、「宵眠不擇安、鼻息若炊釜」という安心した作者の熟寢のいひきか、詩の全體に違和感なく溶け込んている。蘇軾の場合、彼の個人的な體驗から「鼻息」に持たせるイメーシを途中て變化させた。一方蘇轍は、特に「安心熟寢」する人物のいひきという意味てのみ、詩語としての「鼻息」を繼承したことか分かる。

次に、元祐以來蘇軾と親しかった友人の李之儀（字は端叔、號は姑溪居士、一〇四八～一一二八？）の詩を見る。彼は、「首夏」（『全宋詩』巻九七二）という詩の中で「鼻息」を用いている。

嬌紅掃盡緣陰成　　嬌紅掃き盡きて緣陰成り
便覺庭虛暑氣生　　便ち覺ゆ庭虛にして暑氣生するを
旋拂藤床方竹枕　　旋ち藤床を拂ひ方に竹に枕せんとす
不妨鼻息作雷鳴　　鼻息の雷鳴を作すを妨げず

あてやかな紅い花か一掃されて緑樹の陰かてきると、こんとは庭がからんとして夏の暑さを感しるようになった。すぐさま藤の寢床を拂って竹を枕にし、いびきか雷鳴のような轟音をたてるにまかせる。

静かな庭を自らのいひきの音で獨占しなから午睡を滿喫するという狀況は、蘇軾の「佛日山榮長老方丈五絕　其四」と共通する。たか、李之儀の詩は徹底して爽やかな初夏の晝寢の樂しみを述べた七言絕句である。また、彼の詩には「清風」も「庭花」も無く緑の暑氣に定んたような木陰の静けさと、「鼻息」の音のコントラストか際立っている。李之儀も蘇轍と同樣、悠々とした「安心熟寢」のイメーンとしての「鼻息」を採用したことか分かる。

また、蘇軾の影響を強く受けたとされる汪藻[13]（字は彦章、一〇七九～一一五四）も、「大熱行旃德山中不可車馬步至凌氏林亭詩（大熱行、旃德山中は車馬すへからす、歩して凌氏の林亭に至る詩）」詩（『浮溪集』巻二十九、四部叢刊初編）の中で「鼻息」を用いる。詩の一部を引用しておこう。

庭空燕雀乳　　庭空に燕雀乳ひ（やしな）
樹老莓苔封　　樹老いて莓苔封つ
露㲉過牆竹　　露㲉りて牆竹を過ぎ
風凄横澗松　　風凄く澗松を横ぎる
欣然曲肱卧　　欣然として肱を曲げて卧し
鼻息春醅濃　　鼻息す　春醅濃し

庭はからんとして燕や雀か子育てをしており、樹木は老いて一面苔に覆われている。露は流れ出て垣根の竹を過き、風ははげしく吹いて澗の松の横を通る。心地よく肘枕で眠り、私かいびきをかくのは春の強い濁酒のため。

この詩では、晩春の庭の景に溶け込んた作者が、悠々と晝寢をしなから「鼻息」をしている。李之儀の詩と同樣、暖かな午後の情趣を切り取った一場面を描いているのてあり、ここての「鼻息」はもはや氣樂な午睡にお決まりの風物の一つとして扱われている。ここに至って「鼻息」という言葉からは、音聲的なインパクトや荒々しい俗臭はおろか、特有の滑稽味すらも剥き取られている。そして、安心した熟睡狀態とイコールの關係て結ばれ、通常の詩語として用いられる穏やかな言葉として定着しているのてある。このことは、南宋の楊萬里か「鼻息」を詩に用いている事實を傍證とすることかてきるたろう。

楊萬里は、作詩の際に注意深く來歴の確かな俗語を選擇する詩人である。[14]「春夜孤坐三首　其一」（『誠齋集』巻十二、四部叢刊初編）詩を見てみよう。

兒女鼾鼾鼻息聲　　兒女　鼾鼾　鼻息の聲
虛堂誰伴一先生　　虛堂　誰か伴ふ　一先生に
春寒夜靜燈花落　　春寒　夜静かに　燈花落つ
數盡殘更睡不成　　殘更を數へ盡くして　睡成らす

子どもたちは熟睡してごうごうと大いひき、うつろなこの部屋に誰が私と一緒にいようか。春の寒さのなか夜は静かで燈心か花形に燒け

落ちてゆく、明け方の四時まで數え終わったのに私はまだ寢付けない。

深夜に子どもたちが無心に熟睡している様子を「兒女齁齁鼻息聲」と、齁齁たる「鼻息」で表現している。靜かな環境と人間のいびきである「鼻息」とが無理なく融合し、詩人を取り巻く穏やかな時間の流れを表現している。

六、おわりに

蘇軾は人間のいびきを表す詩語として「鼻息」を選擇した。特に、「鼻息」という言葉で自分自身がいびきをかいて眠る様子を描いた詩を五首作った。この五首という數は、彼の先人が作ったいびきの詩と比較して多いと言える。そのうち熙寧年間の三首は、豪快ないびきの轟音に自らの「不平」の氣持ちを韜晦させるユーモアの表現として「鼻息」を用いたものである。しかし、烏臺詩案の後に新生できたことを喜んだ彼は、「鼻息」に持たせるイメージを自ら改めた。晩年、元符年間の二首において、蘇軾の「鼻息」は自然な生の必然とも言うべき「安心熟寢」に伴ういびきを表している。以後、蘇軾の詩友と後繼者たちは、人が安心して熟睡するときの呼吸音を示す言葉として、「鼻息」を詩に採り入れていった。いびきそのものは、本來詩に多くは取り上げられない俗な題材であった。また、「鼻息」という言葉は、元來人のいびきを指す詩語としては一般的でなかった。しかし、蘇軾がこの題材と言葉を肯えて選擇して提示したことによって、その後の詩人も自然な熟睡の象徴として詩に用いるようになり、「鼻息」が本來持っている俗臭と音聲的な衝撃は薄らいでいった。そして、南宋までには受け容れやすい詩語の一つとして定着した。「鼻息」は、身近て日常的なワンシーンの中から蘇軾によって選擇され、宋詩の流れのなかで詩語に昇格した言葉の具體的な一例と言えるたろう。

注

(1) 何薳『春渚紀聞』については『學津討原』本、および張明華點校『春渚紀聞』(唐宋史料筆記叢刊、中華書局、一九八三)を參照した。

(2) 孫樵は、字は可之。韓愈のもとで學び、大中年間(八四七—八五九)に進士にあげられた。

(3) なお、「嘲鼾睡」は韓愈の作てはないとの論かあるか、從わない。周紫芝『竹坡詩話』には、「世所傳退之遺文、其中載「嘲鼾睡」二詩、語極怪譎。退之、平日未嘗用佛家語作詩。今、云「有如阿鼻尸、長喚忍衆罪」、其非退之作決矣。又如「鐵佛聞皺眉、石人戰搖腿」之句、大似鄙陋。退之、何當作是語。小兒輩亂眞、如此者甚衆。烏可不辨。」という一條かあり、「嘲鼾睡」か韓愈の作てあることを否定し排斥する。しかし何孟春は、「退之「嘲鼾睡」二詩、竹坡周少隱、謂其怪譎無意義、非退之作。春以爲、不然。此張籍之所謂駁雜者。退之、特用爲戲耳」と述へ、韓愈の詩てあるとみなしている。ここては何孟春に從い、韓愈の作品として扱う。

(4) この詩の制作年について、四部叢刊本の注に「嘉祐四年」とある。嘉祐四年(一〇五九)の作てあれば、歐陽修は五十三歳、給事中、知制誥、史館修撰なとの職にあった。なお、詩の第七句から第十二句には、「憶昨開封暫陳力、屢乞殘骸避煩劇、聖君哀憐大臣悶、察見衰病非虛飾、猶蒙不使如罪去、特許還官還舊職」と煩忙の職の苦痛を述へている。

(5) 「嘲鼾睡二首　其一」の原文は、『朱文公校昌黎先生文集遺文』卷一、四部叢刊初編に據った。訓讀は、送り假名の表記の一部を除き、久保天隨譯『韓退之全集』(續國譯漢文大成、日本圖書センター、一九七八)に據った。なお、「嘲鼾睡二首　其二」冒頭四句の訓讀および解釋にっ

いては、後掲注（6）の谷口匡氏の論文に從った。

（6）谷口匡「「張中丞傳後敍」と韓愈の立場」（『筑波中國文化論叢9』一九八九）

（7）韓愈「送孟東野序」の解釋は、大木康『不平の中國文學史』（筑摩書房、一九九六）二二頁・二三頁に據った。

（8）李燾撰『續資治通鑑長編』卷二百十四、神宗熙寧三年に、以下の記事がある。「詔江淮發運、湖北運司體量殿中丞、直史館蘇軾居喪服除往復賈販、及令天章閣待制李師中供析照驗見軾妄冒差借兵卒事實以聞、侍御史知雜事謝景溫劾奏故也。景溫與王安石連姻、安石實使之。窮治、卒無所得。軾不敢自明、久之、乞補外。上批出與知州差遣、中書不可、擬令通判潁州、上又批出改通判杭州。」（中華書局、一九九二、第九冊、五二〇一頁）

（9）蘇軾は熙寧四年（一〇七一）の十一月二十八日に杭州通判に着任した。そして、熙寧五年には、「鴉種麥行」「畫魚歌」「吳中田婦歎」（すべて『合注』卷八）など社會の有樣を諷刺する詩を作っている。「鴉種麥行」には見回りに來るだけで役に立たない勸農の使者が描かれ、「畫魚歌」は民に重稅を課し嚴しい刑罰で臨む政府を比喩によって諷した詩、「吳中田婦歎」は凶作にもかかわらず稅金を納めて困窮する農婦をうたった詩である。

（10）韓愈「石鼎聯句詩序」原文。「元和七年十二月四日、衡山道士軒轅彌明、自衡下來、舊與劉師服進士、衡湘中相識、將過太白、知師服在京、夜抵其居宿、有校書郎侯喜、新有能詩聲、夜與劉說詩、彌明在其側、貌極醜、白鬚黑面、長頸而高結、喉中又作楚語、喜視之若無人、彌明忽軒衣張眉、指鑪中石鼎、謂喜曰、子云能詩、能與我賦此乎、劉往見衡湘閒人說、云年九十餘矣、解捕逐鬼物、拘囚蛟螭虎豹、不知其實能否也、見其老、頗貌敬之、不知其有文也、聞此說大喜、即援筆題其首兩句、次傳於喜、喜踴躍、即綴其下云云、道士啞然笑曰、子詩如是而已乎、即袖手聳肩、倚北牆坐、謂劉曰、吾不解世俗書、子爲我書、因高吟曰、龍頭縮菌蠢、豕腹漲彭亨、初不似經意、詩旨有似譏喜、二子相顧慙駭、欲以多窮之、即又爲而傳之喜、喜思益苦、務欲壓道士、每營度欲出口吻、聲鳴益悲、操筆欲書、將下復止、竟亦不能奇也、畢即傳道士、道士高聞大唱曰、劉把筆、吾詩云云、其不用意、而功益奇、不可附說、語皆侵劉侯、喜益忌之、劉與侯皆已賦十餘韻、彌明應之如響、皆頴脫含譏諷、夜盡三更、二子思竭不能續、因起謝曰、尊師非世人也、某伏矣、願爲弟子、不敢更論詩、道士奮曰、不然、章不可以不成也、又謂劉曰、把筆來、吾與汝就之、即又唱出四十字爲八句、書訖使讀、讀畢謂二子曰、章不已就乎、二子齊應曰、就矣、道士曰、此皆不足與語、此寧爲文邪、吾就子所能而作耳、非吾之所學於師而能者也、吾所能者、子皆不足以聞也、獨文乎哉、吾語亦不當聞也、吾閉口矣、二子大懼、皆起立牀下拜曰、不敢他有問也、願聞一言而已、先生稱、吾不解人閒書、敢問解何書、請聞此而已、道士寂然若無聞也、累問不應、二子不自得、即退就座、道士倚牆睡、鼻息如雷鳴、二子怛然失色、不敢喘、斯須曙鼓鼕鼕、二子亦困、遂坐睡、及覺日已上、驚顧覓道士不見、即問童奴、奴曰、天且明、道士起出門、若將便旋然、奴怪久不返、即出到門覓、無有也、二子驚惋自責、若有失者、閒遂詣餘言、餘不能識其何道士也、嘗聞、有隱君子彌明、豈其人耶、韓愈序。」

（11）朋九萬撰『東坡烏臺詩案』の「與劉攽通判唱和」の條に以下のように言う。「熙寧六年九月內、軾和劉攽寄秦字韻詩云、「白髮相望兩故人、眼看時事幾番新」以譏諷朝廷。近日更立新法、事尤多也。」（『函海』第一函所收、二十四葉）

（12）本文「楚襄王問於宋玉曰、「先生其有遺行與？何士民衆庶不譽之甚也？」宋玉對曰、「唯、然、有之。願大王寬其罪、使得畢其辭。客有歌於郢中者、其始曰「下里巴人」、國中屬而和者數千人。其爲「陽阿薤露」、國中屬而和者數百人。其爲「陽春白雪」、國中屬而和者不過數十人。引商刻

羽、雜以流徵、國中屬而和者不過數人而已。是其曲彌高其和彌寡。故鳥有鳳而魚有鯤。（後略）」（宋玉「對楚王問」）

(13) 錢鍾書『宋詩選註』（人民文學出版社、一九五八）一二一頁に、「從他（汪藻）的作品看來、主要是受蘇軾的影響。」とある。

(14) 錢鍾書『宋詩選註』一五九頁に、「請看他（楊萬里）自己的話：『詩固有以俗爲雅、然亦須經前輩取鎔…』」とあり、また、「他用的俗語都有出典、是白話裏比較『古雅』的部分。」とある。なお、『宋詩選註』の讀解に際し、宋代詩文研究會譯注『宋詩選注（1～4）』（東洋文庫、平凡社、二〇〇四～二〇〇五）を參照した。